

巻頭言 「冬空に御子を仰ぐ」

宇野 元

冬は、剪定の季節。先週休暇をいただき、小平の家の剪定作業をしました。とくに、ばらの棚（パーゴラ）に二種類の大型つるばらがあり、平屋の家の屋根にまで枝を伸ばす勢いで覆っています。毎年、それらの枝をバチバチ切りおとす必要があるのです。庭が小さなジャングルにならないように。

真冬の、葉がすべて落ちた木々の凛々しさ。清々しさ。葉が繁っているときには見えなかった木の姿が、冬空を背景にくっきりと現れています。それぞれに、枝ぶりにも幹の肌にも色にも個性がありますね。私は樺の枝ぶりが好きで、箒を逆さにしたような形にほれほれします。ソメイヨシノは、花とは対照的な、野性味あふれる黒々とした枝を四方にひろげていますね。どの木もきわめて個性的に、天に向かって、そのひとつひとつの姿に感動します。

この季節の樹木の姿を楽しみながら私が思うのが、洗礼者ヨハネです。主のご降誕の感謝とともに思い起こす人物の一人です。この人を木にたとえるなら、と想像します。きっと杉が似合うでしょう。メタセコイヤという巨木も合うでしょう。まっすぐ天を指さしているような存在。ひたすら御子イエス・キリストを仰ぎ、この方を見よ、と世に注意をうながした人。彼は言いました。あの方、すなわちイエスは、ますます栄え、私は衰えなければならない、と（ヨハネ 3 章 30 節）。聖書のなかには魅力的な人物がたくさんいますが、そのなかでも会ってみたい人です。彼のようにでありたいと憧れる人であり、とても自分はそうなれないと思う人です。主イエスのことを口が酸っぱくなるほど語り、自分のことは一切語らない。自分についてはきっぱりと「私は衰えてゆく」と語る人。自らが有限な存在であることを十分わきまえていなければ、そんなふうには語れないでしょう。しかしそれは、主イエスの栄光を待ち望む強さと結びられています。天にまなざしを向け、主イエスにある幸いを見えています。

合わせてもう一人、御子をとりにくく群像のなかから。シメオンは、お生まれになった御子イエスを抱きあげ、喜びにあふれてこう言いました。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、このしもべを安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです……」（ルカ 2 章 29-35 節）。私たちの外側を飾っているものは落ちてゆく。けれども、救い主と共にあることはどんなに幸いなことでしょう。